

生活敬語法推移の軌跡--対話の表現心理

| | |
|-----|---|
| 著者 | 神部 宏泰 |
| 雑誌名 | 清心語文 |
| 号 | 4 |
| ページ | 1-15 |
| 発行年 | 2002-08 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1560/00000342/ |

生活敬語法推移の軌跡

—対話の表現心理—

神 部 宏 泰

はじめに

敬語の存立は、古来、日本語の一つの特色とされてきた。しかし敬意の表現、ていねい意識の表現となると、何も日本語に限ったことではない。それどころか「敬語は日本語だけのものではない」(J.V.ネウストプニー)として、日本語の敬語にきわめて近い、世界の敬語事象の存立も、詳細に報告されている(林・南1974)。それにしても、日本語の敬語は特定の語彙や用法を持っている。その敬語法の発達は特段のことではなからうか。

本稿で言う「生活敬語」とは、生活語に生きる敬語を指している。いわゆる中央語(共通語)の世界で敬語がいったん成立した後に、その敬語がどのような展開・推移をたどるのか、それを地方の生活語の世界でおおよその筋道を追跡してみたい。なお共通語を日常用いて生活している人びとにとっては、共通語ももとより生活語である。が、ここでは、共通語を日常の生活言語圏の外に位置づけている、地方の多くの人びとの生活語を念頭においている。

一、敬語を生む日本語の風土

日本語は、本質的にムラ社会(集団社会・閉鎖社会)の言語と言われることがある。ムラの住民の言語、ムラ人の会話行動に育まれた言語、ということであろう。そのムラ社会の言語を、また内(ウチ)・外(ソト)の論理で説明しようとする研究者もある(牧野 1996、森田 1998 他)。言うまでもなく、ムラの内うちでの言語生活はウチの人間関係、つまり「親」の人間関係に基づく言語をもって行われ、ムラの外とかかわる言語生活はソトとの人間関係、つまり「疎」の人間関係に基づく言語をもって行われる。両者に、話し手聞き手相互の間の心理的距離感の点で、差異の存することは言うまでもない。

敬語は、本来何らかの身分意識・上下意識、あるいは敬遠意識のもたらす人間関係のなかで生まれるとしてよい。が、ウチ同士の人間関係とソトに対する人間関係とでは、その意識にもおのずから差異がある。ソト意識のかかわる人間関係では、緊張度の高い敬語が生まれやすからう。それに引きかえ、ウチ意識の人間関係では敬意表現も穏やかなものになりがちである。もとよりウチにはウチの社会秩序——道徳律がある。その言語生活は、ムラの内うちの生活と道徳律に合った、人間とその心の交わりを基本にしていよう。

ムラ言語の性格を担っているとされる日本語は、たしかにその表現も生活性・主観性

を帯びている。日本語の表現では、話し手が、まず相手と場を見定めることが重要である。相手が話し手に把握されてはじめて表現活動が開始されると言うてよい。このことはまた、話し手が相手に拘束されることによって表現が成立するということもできる。上述のとおりその相手がソト関係と意識されれば、待遇の表現は手厚いものとなろう。その手厚い表現の原理は間接法であり婉曲法であって、それが一定形式として固定した事象が敬語に他ならない。逆にごく内うちの関係であればくだけた待遇のしかたになるのが普通である。特定の生活語社会では、敬語のない表現の行われることも珍しくない。日本は敬語の国とされがちであるが、敬語の存しないウチの世界もあるのである。その場合待遇の心づかいは、例えば思いやりの心や態度など他の表現方法によって満たされるのが普通である。敬語によらない場合も、人間関係に即して交流が動的で細やかであることに留意する必要がある。

二、中央敬語と地方敬語

ここで仮に「中央敬語」としたものは、おおむね共通語に行われる敬語を指しており、「地方敬語」としたものは、先に定義した生活語に生きる敬語、すなわち生活敬語を指している。さらに上乗の用語を用いれば、前者はソト関係の勝る敬語であり、後者はウチ関係の勝る敬語である。もとよりソトにもウチの世界があり、ウチにもソトの世界がある。が、しばらくこのように区分して、大局を把握することにしたい。

敬語が新しく成立するとなると、それは主として国の中央である。中央は、政治・経済等の動態につれて、物と人の動きが激しい。この社会に生きる人間関係もまた複雑である。いわば中央はソトの際立つ世界である。しぜんここには複雑な敬語が生まれやすい。多様な人間関係が敬語を必要とするからである。

新しく敬語が生まれたとしても、その敬語はいつまでも中央に留まっているわけではない。人の移動と共に地方に運ばれていく。その場合、中央でも、当該の敬語が未だ盛んに活動していることもあれば、すでに衰微していることもある。衰微のあげく、全く形を留めなくなっている場合さえもある。が、地方の人びとは、そのような動きには関心が薄かった。ただ、中央から伝播してきた敬語を、自らの生活語のなかにどう取りこみ、自らの敬意表現のためにどう順応させ、活用するか、しぜんの心を傾けたかのようである。本稿では、述部の敬語にしばって、その実情に注目してみよう。

三、地方と地方敬語の論理

ここで言う地方は、先項のムラの世界であり、ウチの世界である。閉鎖的な集団社会である。ここは、個人よりも全体が優先する社会である。集団社会の安寧と息災を至上とする、全体の論理、協同・協調の論理が支配する社会である。ここで個人は、たしかに全体に埋没しているかの感がある。が、その個人も、実は単に全体に埋没しているだけの存在ではなかった。全体の秩序と繁栄を願い、連帯・協同の奉仕と責任を担うことによって、いつの世にも一人ひとりがムラ社会・連帯社会の屋台骨を形成してきたので

ある。そしてこの生きかたこそが、個人自らの生を支える道でもあると信じたのである。その観点からしても、地方は中央に対して、単に受け身に立つだけの存在ではなかったと言ってよい。地方には地方の生きかたがあり、論理があることはむしろである。このような社会に迎え取られた敬語も、その生活論理に支えられて、個性的な生きかたを見せるようになったのは、しぜんの推移であった。

地方の生活語の世界にももとより敬意表現がある。その諸相についての詳細は、いまは省くほかはない。ここでは中央から伝播してきた敬語をどう受けとめ、どう活用したか、あるいはしているかという問題にしぼろう。先にも述べたとおり、地方の生活語は、主体性をもって安定しており、中央の言語に対して一方的に受け身に立っているわけではない。中央から敬語を受け入れたとしても、その敬語は、当該の社会にあって新しく生活語化し、特殊な生命を得て必要な役割りを果たし、一定の位置を獲得している。

いま本稿では、論述の必要上仮に中央と地方の言語を区分したが、本来両者は、合い寄って日本語の実質を支えているのである。地方の生活語の活力と動態も、日本語の現実相と発展相に他ならない。このことはここに改めて言うまでもない。

なお地方にも種々相があり、その性格も中央語の受け入れかたも一様でない。がここでは、統合の見地に立ち、中央に対する地方という観点から問題を把握し、その地方性に基づいて生きる生活語を対象とすることにしたい。

四、地方における中央敬語の活用

地方の生活語が、特定の中央の敬語を、その体系のなかに受け入れたのは、基本的に言えばその敬語の活用・利用を欲したからであろう。ソトからの敬語は、ウチの世界に見られない新鮮な機能、高い敬意を示していたに違いない。が、その新来の敬語も、時にその敬意を利用することがあったとしても、あるいは利用に備えて保留されることがあったとしても、その自在の活用を地方の生活語体系のなかに根づかせるには、それなりの修訂が必要であった。すなわち形式と意味（敬意）の両面において、当該の生活語の機能や体系に適う手直しである。その方向は、おおむね地域での親愛語化を旨としたものであったかのようである。この生活語化は、むしろ時を必要とした。が、その推力は間違いなく地方生活語の主体的論理である。その生活語化には、大きく「語形の変容」「語形の短縮」「新敬語の派生」「本来敬語の活用」の四方向が認められる。

1 語形の変容―「ナサル」敬語の場合―

「ナサル」は、古く中世の頃に成立した敬語である。それがなお今日でも、何ほどか共通語としても行われている、息の長い敬語である。成立以来約400年余りの間に、この敬語もほぼ全国に広まった。今日、全国各地で見出だされる転化の諸形式は、30種にも及ぶが、さらに「マス」のかかわる結合形式（「ナサリマス」）関係を加えるとなると、100種近くにも達している（藤原 1978 参照）。この全国の諸地方に見られる多彩な転化形式も、各地方の生活風土や論理に基づく変容であることは、先にも触れたところである。地方の生活語には、「ナサル」のどのような変容が見られるのか。その実情の一斑

を例説しよう。

近畿で「ナサル」は「ナハル」[naharu]と変容してよく用いられている。

○アッチー イキナハッタ ヨ。(あちらへ行きなされたよ。)[京都]

この変容が近畿で起こったと想察されるのには理由がある。周知のとおり近畿域は「歯茎摩擦音」(サ行子音)を避ける傾向があり、sa>haの変化の特に著しい地域である。この地方に際立つ「誰だれさん」の「誰だれはん」、「ありません」の「ありまへん」などもその例である。その「ナハル」もまた全国に広く分布したかのようである。今日では山陰や四国・九州など西の特定地域にも存立している。

「ナサル」はまた近畿の周辺、特に西域の山陽側および北九州一帯で「ンサル」となっている。その分布状況は上述の「ナハル」の分布とおおむね相補的である。次はその一例である。

○ドケー イキンサッタ ン。(どこへ行かれたの。)[広島]

「ナサル」から「ナハル」、「ンサル」へと、その変化を分けたものは何であったのか、興味は深い。このことには先にも問題にした「サ」行子音の音質が、どの程度にかかわっているのか。「ンサル」の顕著な中国山陽方言では「サ」を格別軟化させることがない。むしろ「サ」が際立って、いきおい前接音「ナ」を軟化させたのではないか。ここにはまた、抑揚の対立的な相違もかかわっているのか。すなわち近畿地方の高平調・曲揚調と、中国山陽地方の後上げ調との差である。いずれにしても語形の変容は、地方の風土と、生活語の性格と論理に支えられているよう。

2 語形の短縮(縮音化)

(1) 「ナサル」敬語の場合

説明を簡略するために、上項の「ナサル」敬語を、ここでも引き続いて取りあげよう。語形の変容は、その短縮化につながる場合が多い。

上項で問題にした「ナハル」は、また「ナル」とも変化した(naharu>naaru>naruru>naruru)。次はその一例である。

○ムコーエ イキナッタ マチガ アリマス。(向うへ行かれたら町があります。《中年女が、旅の者に道を教えて》)[丹波・柏原]

このように「ナル」となったものも、近畿の周辺をはじめ、西の地域のみならず東の地域にも分布していて、濃淡の差はあるもののほぼ全国に見出だされる(藤原1978)。先に広く分布した「ナハル」から直接変化したのか、それとも中央で「ナル」と変化したものが分布したのか、この点については今は定かでない。ともあれ「ナル」は格別の安定形式であったようである。

地方に及んだ中央敬語が、地方性の影響によって変容しやすいことは上述したとおりであるが、近隣の交わりの濃い生活語にあつては、敬語助動詞にも、活動性や安定性を目ざす手ごろな長さ——形式がある。「ナル」のような二音節形式は、その要求に適していたかのようである。この縮音化と共に敬意もやや低下し、日常的で程よい程度のもになった。この変容が、全国にわたって広く受け入れられた要因の一つであろう。

「ナハル」を形成した近畿地方では、また「ナハル」から「ハル(ヤハル)」を生起さ

せた（行かハル・来やハル）。この形式の存立と運用は、ほぼ近畿圏に限られている。いわばこれも近畿生活語の風土が生んだ特色形式である。「行キナハル」が「行カハル」となる（ikinaharu>ikaharu）ような、広母音を柱にして安定する縮音化は、まさに近畿色とすることができ、また本項の敬語形式の短縮化の方向にも沿っている。いわば「ハル」は、同地方の特色敬語として安定した語感と親愛の情意を示しており、人びとの、よこの交わりに欠かせない敬語として熟用されている。一例を掲げておこう。

○センセガ キハッタ ンヨ。（先生が来られたのよ。）〔神戸〕

(2) 「ナサリマス」敬語の場合

前項の「ナサル」は丁寧語の「マス」と結んで、「ナサリ（イ）マス」となって存立することも著しい。このような結合形式は、「ナサル」単独の場合よりいっそう丁寧な言いかたになることはむしろである。その「ナサリマス」の結合形式も全国に分布した。ただこの長めの形式は、改まりや慎みの敬意をよく表したが、人の交わりのあついで、地方の生活語の日常にはなじみにくかったようである。このこともあってか、「ナサ（イ）リマス」は、地方それぞれの生活風土に応じて多くの縮音形式を生んだ。ところでその縮音形式の分布する今日状況を見ると、その多くはおおむね遠隔の地方、いわば辺境とも目される地域に分布していることが注意される（藤原 1978 参照）。今その分布地域の一つ、九州に例を求めてみよう。

熊本県の離島、天草には「ナス」がある。これが「ナサリマス」の縮音形式であることは明らかである。今日、天草では「ル（ラル）」「ス（サス）」「ナス」の三形式の尊敬語が行われているが、そのなかで「ナス」はもっとも高い敬意を表して存立している。次はその一例である。

○ドケー イキナス カ。（どこへ行かれますか。）

熊本県下では、全般に、ソト向けの改まった場合の敬語として、

○オカケナハリマッシェ。ドーゾ。（おかけなさいませ。どうぞ。）

のような「ナハリマス」が聞かれるが、上述の「ナス」も、このような言いかたから、「ナッス」を経て成ったものとみられる。短形の縮音形が、生活語の日常に適う安定形式であったことが推察できよう。

ところで、離島の天草に対する本土部の熊本市一帯では、「ナス」はその命令形（および禁止形）のみを残して、他の一連の活用形はすでに衰滅している。天草は閉鎖性のいちだんと強い離島であるがゆえに、新語の伝来・伝播の速度にもぶく、滞ったであろう。またそのゆえにこそ、現在に至るまで、旧敬語の活力も保持し得たかと考えられる。

なお、熊本市一帯の、命令形のみの残存状況に関しては、後の項で改めて問題にした。

3 新敬語の派生—「ス（サス）」敬語の場合—

中世京都語の「せらるる（させらるる）」に発するとされる「シャル（サッシャル）」敬語がある。これもよく行われて、今日では近畿・中国山陽・四国地方にこそ行われることが少ないものの、ほぼ全国に分布している。九州でもその西北部にこれが多い。

さて、その九州であるが、「先生が 行かッシャッタ」などの「シャル（サッシャル）」

が比較的良好に行われるのは、福岡の筑後・筑前および肥前佐賀の北・西部の一部である。次はその一例である。

○センセイガ コラッシャッタ。(先生が来られた。)[久留米]

佐賀・長崎・熊本の肥筑地方では、「シャル(サッシャル)」よりも、その派生形とされる「ス(サス)」が全般によく行われている。この派生については藤原与一氏に説がある(藤原 1978)。すなわち連用形利用の頻度が高く、例えば「行かッシャッタ」の「シャ」が頻用されるうちに直音化して「シ」となり、「行かシタ」のように言うことが慣習化した。頻度の高い連用形にいったん「シ」が生じれば、これを回転の軸として五段活用方式に類推し、しぜんのうちに「行かッサン」(未然形)「行かス」(終止・連体形)「行かッセバ」(仮定形)「行かッセ(シ)」(命令形)のように、五段活用の「ス(サス)」敬語が完成したとするのである。次はその一例である。

○オトツツァンナ オラス ナ。(お父さんは居られるかな。《中年男性が近所の小学生男に》)[熊本]

この説が支持されるのは、同様に「シャル」敬語が日常よく行われている中国地方の山陰(出雲・隠岐)で、「誰だれさんが 行かッシャッタ」と共に、「誰だれさんが 行かシタ」という言いかたが頻用されていることである。

○ドコ エカシタ カエー。(どこに行かれたかな。)[隠岐]

この「シ」も「～シャッタ」の「シャ」が直音化して成ったものであろう。今日では「行かッシャッタ」よりも「行かシタ」の方がよく行われている。ただし、この連用形「シ」以外の活用形はない。この点が九州の場合とは異なる。

九州では、連用形「シ」を派生させた原形式の敬語「シャル」が、当該の多くの地域で衰滅している。新生の「ス(サス)」敬語に、機能の主要部分を譲り渡しているのである。一方の山陰では、原形式の「シャル」敬語が併存している。いわば相対的な時間差と、これを含む地方性の差異が、両地域に見られる「ス(サス)」敬語の発達の違いをもたらしたかと考えられる。

「シャル(サッシャル)」が「ス(サス)」を派生させたのは、前項の「ナハル」が「ナル」「ハル」に転化したのと同様に、敬語音形の縮音化でもある点に注意したい。この縮音化が地域の敬意表現に適していたとみられる。

「シャル(サッシャル)」の原形式であった「せらるる(させらるる)」は、高位の敬意を備えた敬語であったとされるが、「シャル(サッシャル)」と転化して生じた「シャ」の拗音は、その敬意を支えるのにいくらか重い音感であったのかも知れない。この拗音を避けようとする表現心理が働いたとしても不思議ではない。「ス(サス)」の派生はその心理にも沿っている。音の短縮と共に敬意度が下がるのは一般のことである。「ス(サス)」は、内うちの仲間同士の間での親愛感を表すのに、程よく適した敬語法であったと言える。このような地方での新敬語の形成も、単に受け身や成りゆきというのではなく、地方の生活の実情や論理に支えられたものであったことを再認識する必要がある。いわば、生活語の論理である。

4 本来敬語の活用―「レル(ラレル)」敬語の場合―

本来敬語（共通語敬語）とされるものが、そのままの形式で活用・利用される場合がある。一例を「レル（ラレル）」敬語に求めよう。

「レル（ラレル）」敬語は、中古以来の伝統を持っており、中央をはじめその流れに連なる地方において広く活用されてきたが、その生きかたは単純でない。

今日の「レル（ラレル）」形式が古くは「る（らる）」であり、中世以降は「るる（らるる）」となって推移してきたことは改めてここに言うまでもない。つまり「レル（ラレル）」は、直接には「るる（らるる）」からの転化形である。「る（らる）」および「るる（らるる）」の行われた時期にも、当然ながら地方への分布があり、地方での利用があった。その分布が、国の西部に厚かったことは、今日の残存状況からして明らかである。地方に波及したこれらの敬語は、それぞれの風土のなかで、特殊な形式や用法を生んで生活語に深くなじんだかのようである。ただ、近世中期以降、中央では「るる（らるる）」の活動が衰微していた。それが、中央で「レル（ラレル）」となって復活したのは、近・現代に入ってからのこととされる。当初は文章に用いられることが多かったようである。

「レル（ラレル）」はやがて地方に新しい分布の輪を広げ始めた。「るる（らるる）」の分布からすると、中央からの第二波ということができようか。それも西系の地域に多い。西系の地域の生活語の底層に生きる、かつての「るる（らるる）」の影響も、何ほどかあつてのことであろう。

ここで注意したいのは、例えば九州地方で行われている「るる（らるる）」を見ると、第三者のみを対象にする、いわば三人称敬語であることである（後項の「三人称敬語化」参照）。この傾向は、すでに中世の京都においても存したもののように、ロドリゲス『日本大文典』にも、「るる（らるる）」について次のような記述が見られる。

いくらか畏敬又は尊敬を払ふに価する人々に就いて、主にその人の居ないところで話す場合に使ふのが常である。（土井忠生訳＜三省堂＞ p.581）

ところが、「レル（ラレル）」は、二人称対象でも普通に行われ、「るる（らるる）」に見られるような特段の制約がない。しかも「るる（らるる）」は、活用も不完全ながら四段化（「ル（ラル）」）しているが、「レル（ラレル）」は下一段のままである。このことも、「レル（ラレル）」が、旧来の「るる（らるる）」とは異なった、新しい流れであることを物語っている。

さて新しい中央敬語と目される「レル（ラレル）」は、既述のとおり主として西の地方に分布して、ゆるやかながら活動を展開しつつある。今日では東系の東京あたりへも、日常の口頭ことばとして進出しつつあるようである。いわば復活の敬語で、やや複雑な史的事情のある事象であるが、特定の地方で、中央語そのままの形式・用法でもって受容されつつある現状に注目したい。近畿での一例を掲げる。

○ソツチ コー デラレテ ストント イカレマシタラ ネー。（そちらへこのように出られて、まっすぐ行かれましたらねえ。《老女が旅の者に道を教えて》）

[兵庫・柏原]

ここでは、「レル（ラレル）」が他国人（ソトの人）に対して用いられている。この老女が、地域の生活敬語の「ナハル」「ナル」の話し手であることは言うまでもない。「レル（ラレル）」は、新来の、共通語ふうのものの言いではあるが、この種の敬語が、昨今は、

当該地域に限らず、それぞれの生活語のなかに安定した地位を得ようとしているかのようである。上接動詞を選ばない用いやすさと頃合いの敬意が、なじみやすいものになっているよう。

五、地方における中央敬語の衰退

地方に受け入れられた中央敬語も、すでに見たように、地域の風土や生活に適った生きかたをして新しい生命を得るが、結局はそれもやがて衰退していく。その衰退にあたっては、いくつかの筋道やパターンがある。そのパターンを支えているのは、基本として、話し手による対話の相手の把握のしかたであり、認識のしかたである。相手をどう待遇するのが適当か、その見極めである。特定の敬語形式の持つ待遇価が、相手待遇の射程を割るとき、その形式は、話し手本位の特殊な生態を見せる。その主なパターンを取りあげると、大きく「三人称敬語化」「命令形の特定化」の二方向が認められる。この二項は相互に関係がある。

1 三人称敬語化

(1) 三人称敬語とその形成

敬語は、二人称（相手）に関しても、また三人称（話題の第三者）に関しても用いられる。が、この両者の用法には違いがある。二人称（相手）に関して行われる場合は、その対象である相手は現前にいるのが普通である。話し手は、現前の相手に関して、直接に待遇の度合いを判断しなければならない。同時に話し手は、相手からも直接に心理的な拘束を受けることになろう。こういう状況下においては、待遇価の下がった特定の敬語の使用が困難となる場合がある。

ところが、三人称（話題の第三者）の世界は、話し手の対人意識からは比較的開放された、いわば客体とも言える世界である。話し手は、対象から、直接に心理的な拘束を受けることもない。敬意が低下して、二人称（相手）の世界では立ち得なくなった敬語も、三人称の世界ではまだ生きのびる余地がある。このことがやがて三人称の世界でのみ存立する敬語を生むことになる。先項でも取りあげた、九州の「るる（らるる）」からの「ル（ラル）」がそれである。同じ九州の「ス（サス）」も、熊本市域とその周辺では「三人称敬語」となっている。

○シエンシェイノ コラシタ。（先生が来られた。《教室で生徒が》）

とは言えても、当の教師に直接向かって、「先生いつ来ラシたと（の）」などとは言えない。そういう言語習慣がすでないのである。

三人称敬語も時と共にさらに敬意が退縮してくるのはむろんである。そのあげく特異な性格を見せるようになってくる。それが「身内敬語化」の現象である。

(2) 身内敬語化

三人称敬語も地域の生活語になじむと、内うちの人間関係を語ったり表したりして、その限りでは穏やかで親しみのある敬意を見せる。いわゆる親愛語化である。ただその親愛の心情の程度が進むと、犬や猫などペットに関しても、また自分の身内、家族に関

しても、これを用いるようになる。すなわち、身内を他人に話す場合にその親愛語を用いるのである。これも九州の例である。

○オリゲン シワ モー イカッ コロジャバッテン、(うちの人はもう出かけられる頃だけど、《妻が夫について言う》)[天草]

○心配して ウシロバ ミーミー イキョーラス。(心配して後を振り返り振り返り行っておられる。《母親が自分の子どもを見送りながら、近所の主婦に言う》)[熊本]

実例の「イカッ」「イキョーラス」に見られる「ッ」「ル」「ス」も先項で取りあげたとおり三人称敬語であるが、ここでは身内に関して用いられている。このような用法が一般化しているのも、三人称敬語が、親愛語として慣習化してその終盤に行き着く一つの生きかたである。

上掲の例文は九州語に限ったが、このような身内敬語の用法は、西日本に、飛びとびではあるが、広く見られる現象である。

今日、日本語の敬語運用にあたっては、他人(ソトの人)に話す場合、身内については敬語を用いないのが社会的通則である。にもかかわらず例えば児童が教師に対して「お父さんが言われました」のように、父親について敬語を用いて報告することがある。社員が自社の社長について、敬語を用いて他人に話す場合も同様である。このような言動は正しくないとして、教育上、時に問題にされることがある。たしかにこれも身内に関して敬語を用いた例であるが、本項で取りあげている「身内敬語」とは区別される。先のそれは誤用とされるが、本項の「身内敬語」は必ずしも誤用とは言えない。半ば慣習化一般化している。どの敬語でもというわけではなく、三人称敬語化し、親愛語となって熟しきった事象に限られているのである。

藤原与一氏は、先項で掲げた近畿の京都の「ハル」(<ナハル)について、次のように述べている。

生活の中で、これ「ハル・ヤハル」<引用者注>の熟用の度の増すにつれて、人はついに、相手の前でも、身うちの者について、「～ハル・ヤハル」を言うようにもなった。尊敬表現法の「ていねい表現法」化である。——ていねいにものを言おうとして、人は、慣れた「～ハル・ヤハル」尊敬表現法を、「その場をていねいに表現する方法」に利用するにいたったのである。(藤原 1978、p.417)

ここでは、身内敬語の根底に「ていねい意識」を見ている。その場をていねいに表現しようとする意識が、身内に関しても敬語を用いさせたとするのである。この見かたは、先の、社会通念のうで誤用とした身内敬語の使用理由をも説明することができる。ただ、本項の「身内敬語」は、根底に「ていねい意識」が働いているとする点是否定できないが、特定の親愛語に限って行われている点にも注意しなくてはならない。しかもその用法はほとんど慣習化していて、相手は、その用法を奇異に感じないばかりか、むしろ親しみ深い言いかたとして受け入れているのである。

敬意が低下して、内うちの親愛語としても、相手についてはもはや立ち得なくなった特定敬語が、その親愛の情意を深めて三人称の世界でかろうじて生きのびたとしても、それもやがてひずみが出てくるのではないか。敬意の届く社会的な射程距離が、しだい

に狭まってくるのである。三人称の世界での存立さえも不安定になれば、当の敬語——親愛語は話し手のごく身近な小宇宙に屈折せざるを得ない。それが家族であったり、ペットの犬・猫であったりするのではないか。これも三人称用法であることはむろんである。

(3) 侮蔑語化

敬意が低下した三人称敬語の用法も極まって、敬意の届く社会的な射程距離が極端に退縮してくると、もはや敬意どころではなくなり、一転して侮蔑を表す語に傾いてくる。九州での一例を掲げよう。

○教員やつが 言わール。(教員野郎が言いやがる。)[熊本]

高校生男子が、教員を嘲った一文である。ここに行われている「ル」は、本来、古い伝統的な敬語で、これまでもすでに取りあげた。衰微のあげく、三人称敬語となり、身内敬語にもなった「ル」であるが、「親」への退縮がさらに深まれば、用いかたによっては、「侮蔑」とさえ言える、微妙なひずみを見せてくる。ただ、そのひずみも、対象者を徹底的に追求したり、弾劾したりするほどのものではない。戯画化したり、滑稽化したりして侮蔑感を示しながらも、どこかに情味のある救いを残している。「ル」に限って言えば、侮蔑感を出するのは用いかたによる。「侮蔑語」として内実や用法が定まっているわけではない。が、敬語によってはこの道をたどったものもある。

ところがここで注意されるのは、三人称の世界は「非人格的事物的な」世界でもあるということである(鈴木 1975)。ここでは、敬意が低下して、もはや人事に関しては用いられなくなった敬語も、人事を離れば本来の形式や敬意を見せることがある。

○お日さんの 出らル。(お日さんが出られる。)[天草]

○正月どんの 来らすけん。(正月さんが来られるから。)[熊本]

この例に行われている「ル」「ス」は、上述のとおり特定の「三人称敬語」であるが、これもすでに衰微している。ところが、神や自然現象が対象である場合はこの敬語も本来の敬意を見せる。人事を離れた、三人称の非人格的な対象だからであろう。神格の位置づけは、特定の人にとっては絶対的であって、その心理的距離感は変動しにくいのではないか。

2 敬語命令形の特定化

敬語が衰微して三人称化するとしても、命令形だけは、その傾向や推移に影響されないのが普通である。つまり命令形は、他の活用形とは異なって、独自の生きかたを示している。したがって特定の敬語が三人称化する場合でも、また衰退する場合でも、命令形は、孤立した独自の道を歩むことが多い。敬語が衰退するとき、活用形のなかで、最後まで残存することが多いのも命令形である。

(1) 命令形の性格

命令形が形成や運用の点で、他の活用形と違った生きかたを見せるのはなぜか。命令形は他の活用形とは違い、運用の実際にあたっては、話し手が聞き手に対して命令・勧奨など要求の意図をもって直接に用いるのが普通である。その用法の実際は、語というより文というほうがふさわしい。もっとも命令形のこのような用法は敬語に限らず、動

詞全般についても言えることである。大野晋氏は、古代における命令形の成立について、「連用形プラス感動詞 a（交替形 ö または yō rö）という形で全部が説明できる」（大野 1978、p.207）としている。例えば「咲ケ」は、連用形 saki に感動詞 a が加わって（saki + a）成立したとするのである。同様に、「明ケロ」「明ケヨ」も、ake に rö または yō が加わって成立したとする。このような解釈は、命令形が、相手に対して、何らかの働きかけの要素を含んでいたとみることのできる点で、示唆的である。言うまでもなく、ここで大野氏の言う感動詞が、相手目あての呼びかけ性に支えられた要素であったろうことは容易に想像できることである。また、周知のとおり時枝文法では、観点は異なるが、「起きろ」「見よ」の「ろ」「よ」を、「感動を表はす助詞」として、動詞命令形から切り離して扱っているのが注意を引く。

先述のとおり、命令形の行われる表現の実際は、現前の相手に対して直接働きかけるのが基本である。その働きかけ・呼びかけの要素が命令表現に添えられたとしても、その特定要素が添えられた形のままで慣習化し、命令形式が成立したのであろう。さて、その「見よ」の「よ」に関しては「見ろ」の「ろ」の変化形とする説があり（奥村 1990）、さらにはその「見よ」も、今日、西の多くの地域では「見い」と変化している。「見ろ」から「見れ」となった地域も、国の東西に多い。いったん成立した命令形も、その語尾がさらに変化を重ねて今日に至っている。形式の待遇価と、話し手の待遇意識の変動のなかでゆれた、史的推移の結果であろう。単なる動詞命令形も（敬語でなく）、相手を意識した情意の形式であることを物語っていようか。敬語命令形ともなるとなおさらである。少なくとも命令形の現実には叙述本位に展開する他の活用形とは、その性格において区別されるのである。

（2）命令形残存の実態

敬語が衰微するとき、その命令形が残存しやすい事態は興味深い。ここではまず命令形残存の実態の一斑を取りあげよう。

① 共通語の「ナサル」は先項でもいくらか問題にした。この「ナサル」も共通語の世界では、「（オ）～ナサイ」命令形（オ読ミナサイ・オ出デナサイ）こそ頻用されているものの、他の活用形はかなり衰退している。その衰退した活用形に替わって——と言ってよい状態で行われているのは、「オ～ニナル」敬語（オ読ミニナル・オ出デニナル）である。

「オ～ニナル」は、近世末期に成立した敬語とされ、今日、共通語として一定の地位を保っている。この敬語が命令形を欠いていることは言うまでもない。その命令形を補うかたちで、旧形式の「（オ）～ナサイ」が活動しているわけである。つまり両敬語は、相補的な関係をもって存立していると言うこともできよう。

この事態も、旧敬語命令形の残存例として取りあげることができるが、ただ「オ～ニナル」は、本来、命令形を立てにくい形式である。このことが、旧形式の命令形を温存しやすかったかとも考えられよう。ここで、関連する他例を取りあげる。

② 先に、近畿地方の「ハル」敬語（行かハル・来やハル）を問題にした。この地方によく熟した、親愛の語感を持つ敬語である。ここでも一例を取りあげよう。

○イッ イカハッタン。（いつ行かれたの。）〔神戸〕

この「ハル」敬語にも、多くの地域で、同形式の命令形がない。実際に活用されているのは、同敬語の旧形式の命令形である「ナハレ」(行きナハレ・来ナハレ)＜大阪・兵庫他＞である。次はその一例である。

○ハヨ イキナハレ ヨ。(早く行きなさいよ。)[大阪]

「ナハレ」が「ハル」を生んでも、その命令形だけでは改新波が及ばなかったようである。旧形式をそのまま用いるのが地域の敬意表現に適っていたのであろう。

③ 関連して、今一つ例をあげよう。同じ近畿地方と、西隣の中国地方とが接する地域がある。上乗の近畿からすれば、その西の周辺にあたる。その接境地域南部の一角に、地理的にも行政的にも孤立しやすい地域がある(岡山県日生町)。ここに「ンセ(ヤンセ)」命令法がある(行かンセ・食ベヤンセ)。かつてはこの命令形を含む「ンス(ヤンス)」の、他の活用形も存したのかも知れないが、現在ではこの命令形だけが残存的に行われている。次はその一例である。

○ハヨー イカンセ ノ。(早く行きなさいね。)[日生]

この敬語は、「行かッシャンス(来さッサッシャンス)」などの「シャンス(サッシャンス)」(シャル+マス＜サッシャル+マス＞)から成った形式とされている。「シャンス(サッシャンス)」も古態の敬語で、当該地域でもすでに衰微している。その敬語が残した「ンス(ヤンス)」もすでに衰退しており、上述のとおり「ンセ(ヤンセ)」命令形だけを残しているのである。その命令形も古老の物言い、もはや衰退も近いかのようである。

この地域では全般に「行カレル(来ラレル)」などの「レル(ラレル)」敬語が盛んである。この敬語は同地域を含んで西に広がる岡山県下に殊に優勢であって、岡山市域一帯(備前域)にはその命令形も盛んである(行カレー・来ラレー)。しかし、当該地域では、命令形だけは旧形式の「ンセ(ヤンセ)」がそのまま行われて今日に至っているが、今やその旧形式も衰退している。興味が深いのは、その命令形の衰退を補うかたちで進出してきたのは県都に盛んな「レル(ラレル)」の命令形ではなく、東側からの、近畿で優勢な「ナハレ」である。これが、地域の住民のしぜんの選択である。「ンセ(ヤンセ)」が、主として古老の用いる命令法であるのに対して、「ナハレ」は中年を中心に、やや広い年層に行われるのが一般である。その使用層の広がりを見ても、たしかに新来の命令法と言うことができよう。

当該地域では新来であるが、「ナハレ」もまた旧形式である。ただ、ここで注意されるのは、命令形が、他の活用形とは無関係に動いている事実である。それも概して古態である点が注意される。

④ 上項の「ンセ(ヤンセ)」に関連して注意されるのは、同地域に「下さい」にあたる「ダンセ」のあることである。

○コレ ダンセ。(これを下さい。)

その一例である。これも古老の物言い、すでに衰滅に近い状態で存立している。「クダサル+マス」の「クダサンス」「クダンス」から成ったものであるが、原形はもとより一連の関連形式はすでになく、ただ上掲の命令形のみが存立している。


関連して興味深いのは、近畿西部(播磨)の姫路に「クダン」の存することである。

次はその一例である。

○オカシ クダン。(お菓子を下さい。)

“姫路のクダンことば”として、識者には関心と呼んだ事象である。が、これもすでに古老のもので、衰滅に近い。

ところで上掲の「クダンス」の命令形「クダンセ」という原形式を想定すれば、両者はもともとこの原形式に発する事象ではなかったか。備前の日生では「クダンセ」の頭音「ク」を略して「ダンセ」を形成し、播磨の姫路では尾音「セ」を略して「クダン」を形成したのではないか。言うまでもなくこの種の転化形の形成は、それぞれの地域の言語風土に支えられて生起した、それぞれの地域での安定形式であつたに違いない。近畿に、「菌茎摩擦音」(サ行子音)を排除する傾向のあることは上項でもすでに述べた。備前・日生の頭音の脱落は、[ku]の狭母音の無声化が契機となつてゐるかも知れない。かつて姫路、日生を含む広い地域に「クダンセ」があり、それが今日、このような残存状況を示すことになっているのであろう。

| | | | |
|------|---|---------|------|
| クダンセ |  | (ク) ダンセ | [日生] |
| | | クダン (セ) | [姫路] |

ここで改めて注目されるのは、敬語命令形の残存現象である。地域地域の風土に支えられた形式が形成されており、しかもその風土に適った縮音化の行われている事態が、ここでも興味深く観察されるのである。

⑤ 先の「縮音化」の項で、九州の離島天草と本土部に位置する県都熊本との、「ナス」敬語の存立状況について触れるところがあった。天草では、一連の活用形のすべてが、高い敬意を表して行われているにもかかわらず、熊本ではその命令形のみが活用され、他は衰滅している。熊本での一例を掲げておこう。

○オバサン オチャ ノミナッシエ。(おばさんお茶をお飲みなさい。《中年男が老女にお茶を勧めて》)

以上は一部の例に過ぎない。概して、旧形式となった敬語が衰退する場合、その命令形だけが一定の活力を留めて残存する事例が際立っている。

(3) 命令形残存の理

命令形の用いられる表現は、上述のとおり、話し手が現前にいる相手に対して直接に行うのが基本である。相手と対面した状況で、しかも相手に関して行うのである。その持ちかけの意図は、相手に対する命令であり要求である。当然のこと話し手にとっては負担の意識がある。敬語をもって待遇するような、疎外感を伴う相手であればなおさらのこと、相手からの心的拘束感は大さかろう。このような緊張関係のなかで行われる命令表現であれば、ここに行われる命令形形式は、他の活用形と違って、にわかには衰退・変容を起こしにくかったのではないか。旧敬語や古態敬語の命令形が残存的に行われやすいのも一つにはこのような事情が考えられよう。

ところで一方では、特定命令形の頻用はしだいに慣用化されることもあったであろう。慣用が進めばまた慣用形式としての特殊な表現性が、換言すれば一種の間接性が生まれ

てもこよう。この間接性は、話し手と聞き手との間の、安定した、あるいは均衡した心理的距離感と言ってもよいかも知れない。言ってみれば慣用の命令形を用いていれば無難なのである。むしろこれを変えることのほうが容易でない。

敬語そのものが、本来間接性・婉曲性を基本として形成されたものであるが、いったん成立した敬語も、時の経過と慣用のうちに、その表現効果を失うことが多かったかのようである。敬語が衰微するの、本来の間接効果を薄めていったことに関係があろう。ただ命令形だけは、話し手聞き手の直接的な緊張関係のなかで、上述のとおり、独自の生きかたを見せてきたかと考えられる。他の一連の活用形が衰退しても、その緊張関係のなかで微妙な均衡を保ってきた命令形は、容易に退くことができなかったとも言えよう。しかも、古態形式であることが、日常性からの距離感で、かえって改まりと間接性を高めたかも知れない。そこにまた、古雅の風趣のもたらされることもあったかと考えられる。

残存の命令形も、やがて衰退するのはむろんである。命令形形式そのものが、相手との微妙な緊張関係の弛緩のなかで、変容したり特殊化したりすることもしばしばである。その衰退の道筋にも諸相があるが、今は、別稿に譲りたい。

(4) 統括

以上、地方の生活語に生きる敬語の、衰退過程の主な類型について問題にしてきた。言語の変動や衰退は、敬語に限らず一般のことであるが、ただ敬語は情意の形式である。殊に地方の生活語のなかで生きる敬語法の大概は、親愛語と言うのがふさわしい。その情意の形式が、社会性を薄めて衰退するとき、単純に消え去ることは稀である。相手との心的距離が退縮して、話し手の心の襞に、暗い影を残すことさえある。が、これも、相手との心的狭間に生きた情の敬語の宿命であろうか。

結 び

日本語の特色の一つともされる敬語が、いったん成立した後は、どのような推移を見せてきたのか。本稿では、主として、中央から敬語を受け入れた地方の生活語の世界に、その敬語の推移の跡をたどってみた。地方の生活語も、単に中央の流れを受動的に受け入れるだけの存在ではないことを、換言すれば地方の主体的な意志をもって外来敬語を位置づけていることを、改めて確認したかったのである。

地方の敬語生活は、多様であり、諸相がある。敬語を受け入れない、あるいは持たない風土と生活さえもある。が、それらを大観すれば、地方の敬語生活・敬意生活は、概して親愛の情意に満ちている。隣人や老人を気遣う意識、伝統のなかの協同生活の折りめ折りめを正し、秩序と安寧を互いに確認する意識が根底にある。これをムラの生活の、平和と息災を願う意識、祈る意識と言ってもよい。

新来の敬語には、若い世代が敏感である。生活語に安定した敬語は、当然ながら老年層がよくなじんでいる。なかで古態の敬語ともなると、老年層のものである。敬語は、たしかに新旧重層的である。各層の敬語展開の大要については、これまでも触れてきたところであるが、それも、地方の主体性に基づく活動であることを、重ねて確認して

おきたい。

なお生活語になじんだ敬語は、女性によって支持され、活用されることが多い。老女において際立っている。女性の生活語が、概していいいであると評されることがあるすれば、それは対話の相手との、心的距離感覚の敏感さに関係があろう。大局的に観れば、生活語の伝統と環境への強い順応力・適応力である。情意の敬語が、その女性の言語感覚によって育成された史的一面を評価することも、また重要ではなかろうか。

文 献

- 林 四郎・南不二男（1974）『世界の敬語』（明治書院）
鈴木孝夫（1975）『ことばと社会』（中央公論社）
藤原与一（1978）『方言敬語法の研究』（春陽堂）
大野 晋（1978）『日本語の文法を考える』（岩波書店）
奥村三雄（1990）『方言国語史研究』（東京堂出版）
牧野成一（1996）『ウチとソトの言語文化学—文法を文化で切る—』（アルク）
森田良行（1998）『日本人の発想・日本語の表現』（中央公論社）
小松英雄（1999）『日本語はなぜ変化するか』（笠間書院）
神部宏泰（1999）「社会環境に生きる女性の生活語—その生態と特性—」（ノート
ルダム清心女子大学『環境と女性』）

（かんべ ひろやす／本学教授）